

堀江宗正『歴史のなかの宗教心理学 —その思想形成と布置』

岩波書店, 2009年4月刊, 419頁, 7, 875円

伊井野 友香

自らを宗教とは区別していながら、ある種の宗教性のようなものを持って宗教なき後の人間を支えるような心理学的な思想や運動が現在、多様に展開されている。このように宗教と世俗のグレーゾーンにあるような心理学的思想運動をどのように理解すべきか。本書では、“心理学が「宗教」を対象化しつつ自ら「宗教」に類似した要素を引き継いでいる”ことからポスト「宗教」的な思想運動として、また同時に“宗教を排除するような世俗主義が病理をもたらしているという認識を前提としており、それを治療することを目指”していることからポスト世俗主義的なものとして捉えてその複雑性と曖昧さの解明に挑んでいる。第一部ではこの心理学的思想運動とは何を指すものであるのかその特徴を明確にし、第二部では近代との関係から宗教思想史の中に位置付け、第三部でそれをどのように評価すべきかの基準を提案するという内容構成になっている。まず第一部「宗教心理学の再読」(第一章～第六章)では、心理学者たちが「宗教」をどのようなものとして記述してきたのかを明らかにすることで、宗教とポスト「宗教」の差異を浮き彫りにする。具体的には、複数の心理学者たちの宗教論(自己実現論、儀礼論、社会論、死生観)を取り上げて、心理学の潜在的な自己理解を明らかにして、理念として心理学が何を指しているのかを確認する。

第一章は、自己実現論に焦点を当てた話となっている。著者は、その理論が両極に対置されることの多いフロイトとユング、そして両者の間に各々の立場を保持しているとされるW.ジェイムズ、E.フロム、A.H.マズロー、E.H.エリクソンらは、個々の独自性を持ちながらもその成熟のプロセスにおいて「自己実現」という共通の問題にアプローチしていると述べる。ジェイムズ、ユング、マズローがそれぞれ「回心」「個性化」「自己実現」と呼んだものには「一面的自我を越えた(より以上のもの)(世界・他者・無意識)に触れることで潜在的な可能性としての自己を実現すること」を目指すという共通の枠組が見られ、これをロマン主義的自己実現論と呼ぶ。一方、フロイトは発達プロセスの挫折の分析に注目しがちであるが病的側面を置いてみれば、他者との葛藤を経て無意識的なものを意識化し自己統合をはかるという意味で潜在的な自己実現論を読みとることができる。しかしフロイトのそれは自我の欺瞞性や破壊欲動といった批判的分析を通じて非直接的に自己の真正性へと接近し、同時に他者・共同体・人類とより倫理的な関係を結ぼうとする自己実現論であり、ロマン主義的自己実現とは対照的に倫理的批判的自己実現論と呼ぶ。フロムとエリクソンの理論もフロイト的自己実現論の延長線上のものと理解できる。しかしず

れの心理学的自己実現論にしてもその理念においては《一面的・部分的・虚偽的な自我を越えた「何か」(無意識・他者・共同体・人類・世界)に直面することで、〈自己〉——全体性としての自己、潜在的可能性としての自己、しかし実体化されることのない統制理念としての〈自己〉——を実現するプロセス》という共通のテーマが読み取れる。しかし脱近代の思想として特に受容されたロマン主義的自己実現は、そのテーマである「全体性の回復」を実践に移す過程でナルシズム的な感性主義による大衆的自己実現論へとすり替えが起こった。第一章では心理学的思想運動の特徴である心理学的自己実現の理念を明らかにしたが、この理念と実践の乖離は第八章で再び触れられることとなる。

第二章では、呪術的宗教的治療実践の機能を心理療法が代替しているという見方から、心理療法と宗教的儀礼の関係を考察する。取り扱う心理学者は儀礼論と関わりのあるフロイト、ユング、エリクソンである。フロイトは宗教的儀礼を強迫神経症的なものであるが、集団的な欲断念が宗教儀礼という代替によって平静を保っていると論じた。一方ユングは、神経症を個人がヌーメニ的体験を直接体験するとそれは強烈過ぎてパニックや混乱に陥るが、それを組織的な教義や儀礼を通して間接的に直面することで神経症が防がれているという説を取る。三者に共通する事は、内面から湧き出る原初的力を安全な方向に水路付け、共同体的現実の文脈に定位させる機能や、未来の可能性と関わりつつ過去を振り返りながら現在を構築する営みは従来の伝統的な制度が担ってきたものであるが、近代以降では個々人の課題として負わされるようになり、その「型」の喪失によって力の統制をめぐる葛藤が神経症として現れているという見解である。従って心理療法としては、儀礼本来の機能を引き継ぎながらも、硬直した固定的な世界観へ導くのではなく、遊戯性を取り込み、自己の〈世界〉を試行錯誤的に再構築し続けるような生き生きとした相互交渉のような治療を目指すべきであるという心理学者たち自身による位置付けと自己理解が引き出された。

第三章では、フロイト、ユング、フロムの社会論・共同体論について検証している。三者に共通して意識されていた問題とは、「他律」でなく「自律」が目指される近代社会においては、内面化された権威によりかえって無意識や欲動が過剰に抑圧され逆説的に神経症などのコントロール不可能な要素を生み出しているという問題である。特にユングは、西洋の一神教・近代社会・全体主義といった一面的なものを善として同一化することで、排除された部分は悪として抑圧され、その悪を他者に反映し鬱積した破壊欲動を解放しようとしたものがナチズムであるという主張を行っている。よって心理学者たちの課題は、欲動や欲望を抑圧的ではない仕方ケアすることとなる。どのように解決すべきか。フロイトは最終的に、文化創設の根本には他者と共に生きたいという高次の愛(エロス)があると考え、生命体の自己保存のために他者の排除へと向かうような破壊欲動を、それでもやはり他者と共に生きたいというより高次の願望充足によって淘汰するという戦略を取る。フロムも理性と愛という言葉でこのフロイトの主張を追認する。以上の話をまとめると、心理学が想定する共同体の在り方は、「制度的社会に依存しながら、その規範を問い直し続け、他者との相互依存を自覚し、互いに欲望をケアし、相互調整しあうような人間が連なってゆくようなネットワーク」であろうと著者は述べる。この結論は、第七章で近代哲学から他者への配慮の欠落あるいは他者への配慮が利己主義へと帰結しているという批判、またそれ以降の議論と関係してくる重要な部分である。

第四章と第五章では、心理学において死がどのように捉えられ、心理学独自の死生観がどのようなものであるかを見ていく。フロイト、ユング、フランクルの三者は、その動機は異なっているが、死によって全てが無に帰するという科学的世界観のもたらすニヒリズムの死生観は生の意味や価値を揺るがせるとして否定している。また逆に、宗教的死生観のように霊魂や死後生の実在を肯定するわけでもない。むしろ死後生の観念によって死に対する否定的感情を封印して死の現実から逃げる、あるいは軽視する態度には基本的に否定的である。心理学的死生観においては、死という現実から目を背けたりごまかしたりしないで直視し、そこから生の意味や価値を認識すべきであるという態度が貫かれている。著者は、従来、生と死の問題を担ってきた宗教的死生観が衰退し、しかしニヒリズム的死生観を受け入れることもできずに、上に述べたような心理学的死生観の折衷的性格が生まれたのだと分析する。しかし第五章では、医療の高度化による高齢化、死に直面する期間の延長の著しい現代における心理学的死生観としてエリクソン、J.ヒルマン、キューブラー＝ロスが取り上げられ、特にキューブラー＝ロスが結局死に直面した人間の苦悩を解消するのは宗教的共同体に見られる看取り看取られの関係であることから宗教的死生観を再評価したことに触れる。

第六章は第一部の締めくくりである。心理学は、宗教に関して無意識なものの誠実な直視というカリスマ宗教者の態度や「型」を提供することによって人間の原初的な力や無意識をコントロールし神経症を防いできた側面を評価しこれらを取り入れることで自己形成をしている。一方で心理学は、宗教の一面的な信仰を強要するような権威主義的側面を非難するポスト「宗教」的側面を持つ。世俗主義に関しては、心理学自身その科学的世界観を継承し、宗教的世界観に関しては不可知論に基づいて心的現実である限りにおいて肯定する態度を取る。しかし近代社会の世俗主義を前提としながらも、近代化自体が神経症を招来してきたことに対しては批判的でありポスト世俗主義的である。そして、宗教の個人化によって「型」を喪失しても個人が無意識的なものを上手くコントロールできるように対処し、また近代化のもたらした「自律」による過剰な欲望の抑圧をケアし、宗教の衰退によって宗教なき後の死生観にまでアプローチし、その穴を埋めてきたのが心理学であることが明らかにされた。

以上の心理学の特徴と理念を踏まえた上で、これ以降、第二部「歴史のなかの心理学」（第七章～第九章）では心理学の宗教思想史的位置付けに移る。

第七章では、自己論と他者論というポストモダンの哲学思想の中で心理学的思想運動の位置付けを考察する。現代哲学は心理学的思想運動に対して、近代的主体の自己中心主義による他者への配慮の欠落、あるいは他者への配慮のつもりが実は利己主義に帰結していることを批判する。しかし第一章と第三章で確認したように、そのような現代哲学の見方は一面的であり、心理学の理念は他者への配慮の可能性に開かれている。しかしその理念が定式化・規範化され、例えば自助マニュアル等となってしまうれば批判の通りになってしまう側面は避けられない。しかしフロイト以降のテーマである自我の脱中心化という問題から、対象関係論・自己心理学など自律から他者との連携を重視する流れが作られており、またフランス語圏では自律的自己の放棄・他者への愛や尊重を理想とするような〈他者〉のスピリチュアリテと呼び得る動きもあるという。心理学的思想運動の理念は、〈他者〉のスピリチュアリテに接続する可能性を持っている。しかし完全にそこに至っているとは言えず、それよりも〈自己〉のスピリチュアリティーに親和性を持ち多

大な影響を与えているというのが現代哲学の自己論と他者論という視点から見た現状である。

第八章では、「癒し」の歴史と、その問題点を通して心理学的思想運動の位置付けを試みる。心理療法は、原始宗教以降分離していた宗教と医学を結びつけ、現代における癒しの運動を準備することとなった。近代化に伴う都市化は、清潔さや正常性を維持するために病を排除し、それに対して癒しの実践はその排除されたものを癒して再び共同体に結び付けようとするものであった。近代医学は従来の治療文化を壊し、誰が病気になって誰が治療しても同じ効果もたらす非人格的な治療システムであり、これに対抗する形で精神分析をはじめとする文脈依存的でパーソナルな治療が出現してきたという分析を取り上げる。癒しの運動はこの延長線上にあり、自己治療能力の活性化を目指すために人為性・操作性に対して自己治療への自発性、自己否定に対して自己肯定、そして全体性の回復を理念的特徴とする。しかしこの理念を現代で実践するとすると、資本主義社会においては出版物やセミナーなどを通して「努力なしに願望を実現する」等の宣伝のもとに思想や技法がパッケージ化され、結果として技法化・専門家支配・消費主義に傾き、運動が制度化され社会的存在感を増す過程で逆説的に操作性・権威主義・個性や文脈の無視に陥ってしまう構造的矛盾を抱えていることを指摘する。

第九章では、心理学・心理療法・精神医学、およびそれらの先駆形態を宗教思想史の中に位置付ける。仮に心理学を「心・魂に関する理論と実践」と定義すると、それは形而上学の一つとして始まったとされる。キリスト教の発展と共に心身二元論が強まりデカルトに至って決定的となる。一方、心身一元論(心は身体の付随物だとする説、また電磁氣的エーテルを介することで心身は交流可能なものであるとするメスメリズムなど)は、キリスト教的前提や魂の救済のための理論と実践の意義を損なうことから否定された。その代わりに、魂の存在の余地を残す探究、すなわち魂を身体と引き離して考察する形而上学や、魂を物質とは独立する心的エネルギーとして考察する科学的心理学として展開することを許されたのである。つまり現在主流となっている科学主義的な心理学はプロテスタンティズムの所産なのである。こうして魂の擁護から残った部分、感覚を処理する主体として「心」が対象化された。ここで著者はヒルマンに倣って、一元論的な心理学をアニミズム的心理学、キリスト教の一神教的ヒエラルキーに由来する心理学を一神教的心理学と名付け、次いでベラーの宗教進化論に則り、前者は原始宗教・民衆宗教・大衆宗教と形を変えながら綿々と実践され、ある時から発展した一神教的心理学と折衷・総合しながら多様な宗教思想を生み出すこととなったとまとめている。そして近代において中央集権的権力の主体が歴史宗教から国民国家に移行したことで、個人的信仰は自己実現へと変化したと述べる。

このように自己実現という現象の出自を述べた上で、第三部「心理学批判をめぐって」(第十章～第十一章)では、大衆的实践も含め心理学的思想運動がどのように批評されてきたか、そしてこれまでの議論から果たしてどのように評価するべきかを述べる。

第十章では、近代に登場した特徴的な性格であるとされる「心理学的人間」に対する代表的な評価を概観する。心理学的人間とは、政治的人間として公的生活に関わらず、また宗教的人間のように世俗を拒否せず、近代の経済的人間の精神を内的生活に移し、満足・不満足で心的経済を構成し、経験による洞察と自己反省的操作による救済を理想として人格のコントロールを行う人間のことである。扱っている理論は、リーフ、トリリング、リフトン、ラッシュ、ホームズ、マッキンタイア、ベラー、ローティ、チャールズ・テイラーらなどである。結果的に、初期リフ

トン、ホームズ、テイラーは比較的中立的な立場であるが、いずれの批評家もそれぞれの政治的立場からの議論を展開しており、大衆の実践にばかり注目し、心理学的思想運動が本来目指していた理念的理論を検証していないという問題が著者によって明らかにされている。これは第八章で見たように、心理学の理念と実践が構造的な矛盾を孕んでいることに由来する問題であることが指摘される。

第十一章では、前章で明らかにされたように、一連の先行研究は主に現代アメリカの保守的な知識人による大衆文化の実践批判に偏ったものであったという問題点を踏まえ、この偏りを訂正し心理学の理論と実践の矛盾を包括的に理解するための枠組を提供している。以下の説明は、著者がこれまでの議論を総合して、ミクロな対人関係のレベルと、マクロな共同体・制度・社会・政治との関わりのレベルという二つのレベルにおける肯定的立場と否定的立場からの意見をまとめたものである。

ミクロな対人関係のレベルにおいては、

- ・肯定的立場…心理学の人間は、自己を他者との対話的關係の中で初めて形成されるものにとらえ、他者への誠実さと自己を反省的に直視する真正さとを両立させようと努力する。
- ・否定的立場…一方、現実場面においては他者との関係を自己形成のために利用するような操作的態度に結びつく可能性を持つ。

マクロな共同体・制度・社会・政治との関わりのレベルにおいては、

- ・肯定的立場…また、宗教や道德に関する伝統的規範を相対化しつつ、心理学的に分節化したうえで文化的資源として活用し、それを通して新しい価値観や共同体的感覚を形成しようと努力する。
- ・否定的立場…だが、個人の努力が届かない制度的枠組への同調に終わり、積極的な社会変革や政治参加に結びつかない可能性もある。

肯定的立場は、主に心理学的思想運動の本来的な理念を反映させたものである。その立場の特徴としては、1)心の問題へ経済モデルを導入することの容認、2)伝統的な価値を柔軟に応用して活用していこうとする漸進的改革を支持する立場、3)伝統的な価値が個人的現代的文脈で変容するプロセスへの評価、という点が挙げられている。一方で否定的立場は、1)心の問題を経済的なものに還元することに対する違和感、心に関することを商品にすることへの道徳的嫌悪感、2)あくまで心の問題は伝統的規範の領域の問題であると捉える保守主義的立場、3)伝統的な立場から見て異質なものを排除する二元論的思考、などを反映したものである。

これまで心理学的人間に対してなされた評価は主に否定的立場に立ったものであったが、それが誤りや偏りを含んだものであったことを踏まえて、第一部で検証してきた心理学的思想運動の本来的な理念を肯定的な評価基準として採用している。ただ、否定的立場の評価は一面的ではあるものの心理学的人間の側面を言い当てていることは確かである。著者は、肯定的立場から心理学の理念だけに注目することも実践の逸脱性の隠蔽に繋がるとして、肯定的立場と否定的立場の両方を常に考慮に入れながら心理学的思想運動を評価することが望ましいと結論付ける。

以上が本書の大筋である。宗教心理学という学問分野の内実は、ヴント、ジェームズ、フロイト、ユング、ジャネ、エリクソン、ピアジェらに代表されるように心理学側からの宗教現象・宗教的人物の解剖学が大半であった。宗教学側から心理学を理解する試みは少数であり、例えばそれは心理学者たちの学説研究や、社会学や哲学など他の学問領域の下位領域に散在しているものであり、統一的な学問体系を持っているとは言い難い。

その理由は第九章で、宗教心理学は、心理学が宗教から自らのアイデンティティーを立ち上げる際にその緊張関係の中から生み出された産物であるからという説明がなされている。すなわち、宗教心理学とは心理学が宗教を対象化することで心理学がより高次の説明体系であること示すために生み出された学問なのだという。従って宗教学の中から、宗教思想的に心理学をどのように理解するべきかという問いへの解答は長らく留保されてきた。その問いに対してこの著書では、宗教を心理学によって解釈したものを、再び宗教思想の中に位置付けるというスタンスを持って答えている。

しかしその目的を達するためには、それぞれが非常に独特である心理学理論の根底に流れる共通性を見出し、メタな視点から眺めるという困難な仕事が必要される。このような研究は、著者がこれまでに無かった試みであると自負している通りであり、宗教心理学の新たな局面を切り拓いたと言えよう。こうした研究があつて初めて、個々の心理学者の考えの共通する方向性、指向性の違い、重点の違いを比較し検討することが可能となる。この際に著者は丹念に独自の解釈を持って著作を追っているのであるが、本書評では文字数の制限から、その細部にわたる比較研究の緻密さを伝えられなかったのは残念である。

宗教心理学理論全体を俯瞰し、膨大な先行研究の傾向を把握し、学者たちの論説を手際良く特徴付けて比較しているため、宗教心理学の入門者にとっては参考になるだろう。もちろん修学者が読んでも非常にクオリティーが高く読み応えがある。研究者同士の差異と共通性の細部にわたる緻密な比較、そして宗教思想史に心理学を位置付けるという二重の困難な仕事を成し遂げているこの著書は、今後の宗教心理学研究にとって貴重なものと言えるであろう。